

読み手の価値判断基準となる信念と読解水準との関係

大 関 嘉 成

本研究の目的は、書き手のジェンダーに関する主観的主張が主として記された文章の読み取りにおいて、読み手の信念の差異が、その読解水準に及ぼす影響を調査することであった。読み手の信念を測定するにあたっては、文章内容に対する受容度と性差観を取り上げ、分析する際はそれぞれ独立して行われた。また、読解水準に関しては、統語論的レベル、意味論的レベル、実用論的レベルの3水準を採用し、それを測定するための課題を設定した。そして、大学生・大学院生32名を対象とし、受容度の高低、または性差観の差異と読解水準との関係を検討した。結果として、受容度は読解水準と関連を有しないことが確認された。一方、文章内容を支持する性差観を保持する者は、より深い読解水準に到達することが確認された。よって、読み手の一信念と文章内容の一致程度がその理解程度と関連を有するという示唆が得られた。

キーワード：文章読解、読解水準、受容、性差、信念

問 題

文章読解とは、読み手が文章内容についての構造化や内的整合化を行い、結束性のある心的表象を作り上げることであると言われている。そしてその際、ほとんどの場合において、読み手は既有知識を利用して、その心的表象を作り上げていくことになる。

しかし、読み手がその文章内容と矛盾する既有知識を保持している場合、そのような文章読解の達成は困難なことが先行研究から考えられる。以下に、先行研究のうち、主な研究を紹介する。

テキストとして、科学的知識が記述された文章を扱った研究では、麻柄(1990)や工藤(1993, 1997)が挙げられる。麻柄は、「チューリップには種ができない」という既有知識を保持している大学生に、「チューリップにも種ができる」という内容が記述された文章を読ませ、その後に文章内容に関する再生テストを課した。その結果、「チューリップに種はできないと書いてあった」と回答した大学生が存在したことが確認されている。また工藤(1993)は、「信念依存型誤読」(Belief-Dependent Misreading、以下、BDMと略記)が文章の読解過程においてどのように生起するかを検討するため、ヒマワリの生態に関する俗説である回転説(「ヒマワリの花は太陽の動きを追って回

る」)という既有知識を取り上げた。そこでは、読み手の既有知識の影響を十分に評価するために、「統語論的レベル」、「意味論的レベル」、「実用論的レベル」の3種の「読解レベル」を想定した上で、「東を向いて開くヒマワリの花」(瀧本, 1986)を被験者に読ませ、それら3つの読解レベルごとに、BDM がどの程度生起するのか調査された。その結果、回転説を否定する内容の文章であったにも関わらず、全てのレベルにおいてBDM が出現し、特に実用論的レベルにおいて、最も高い頻度でBDM が出現することが明らかにされた。さらに、統語論的レベル及び意味論的レベルで正しい読解をしているにも関わらず、実用論的レベルでBDM が生起するケース、つまり、文章の意味内容を理解しているにも関わらず、そのことが既有知識にほとんど影響を与えていないと考えられるケースがみられた。なお、工藤(1997)では、文章から得た新情報と読み手内の孤立した既有知識とをルール・システムの中に位置付けるという、BDM を抑制するための方略が示されている。

また、社会的事象が記述された文章を扱った研究では、舩田(1997)が挙げられる。舩田は、「夫婦別姓法案」について解説した文章を使用し、それに関する既有知識の正誤だけではなく、当該文章内容に対する読み手の意見がその読解にどのような影響を及ぼすのかを、「再生的問題解決」の課題と「生産的問題解決」の課題を設置して、検討した。その結果、読み手が当該文章の内容に関する知識をもっておらず、かつ批判的であることが、新しい知識の獲得を阻害してしまう可能性が示された。さらに、読解によって得られた知識が読み手の中で適切に位置付かなければ回答が困難と考えられる生産的問題解決の課題に正答するためには、意見の方が知識よりも大きく寄与する可能性も示された。そのことから、生産的問題解決のためには、新しい知識の前提となる正しい知識と文章内容に対する受容的な態度が必要であるという考察が得られている。

以上の先行研究より、文章記述内容と矛盾する既有知識の存在は、その読解を妨害すると考えることができよう。

ところで、我々が読解を試みる文章は、科学的知識や社会的事象が記された文章だけとは限らない。新聞紙面の社説欄しかり、巷の論評文しかり、教室で読まれる国語科教科書の説明的文章や道徳の資料文章しかり、それら、各筆者が自己の主観的主張を展開するために著した文章を読むことも多分にある。いや、そうした文章を読む機会の方が、一般的には、成人後も含めると現実的に多いのではないだろうか。その時に読み取りが重視される内容とは、科学的な正しい法則や社会的な制度といった確固たる事実ではなく、まさに筆者の主張であろう。実際、学校教育における説明的文章の読解においても、その筆者の主張の読み取りに重きが置かれている。文章を通しての他者理解を促すためには、正確な主張の読み取り、すなわち主張の読解が達成されることが必要なのである。

そこで本研究では、主として筆者の主観的主張が含まれている文章をテキストとして使用し、読み手の既有知識がその読解にどのような影響を及ぼすのかを、特にその読解水準との関連をみることにより、検討することとする。この際、読解水準の測定が重要になるが、先行研究のように、課題の違いから生じる問題解決の方法を確認することにより、概ね測定することができるだろう。

さて、この文章の読解水準に関しては、Kintsch (1994) は、文章から得られた情報と読み手の既

有知識との統合程度により、「テキストベース」と「状況モデル」を想定している。先述の工藤(1993)によれば、「統語論的レベル」、「意味論的レベル」、「実用論的レベル」が設定されており、舛田によれば、その課題解決の程度により、「『再生的問題解決』の課題に正答できる水準」と「『生産的問題解決』の課題に正答できる水準」が考えられているといえよう。また、森ら(1995)は、文章を理解するための知識として、「辞書的知識」、「統語論的知識」、「意味論的知識」、「語用論的知識」を挙げ、辞書的知識を除く3知識においてはそれぞれの理解処理が成されると述べていることから、それぞれの知識を獲得している状態をその水準と考えることができよう。さらに工藤(2008)は、知識理解の水準として、「『知識の直接的適用』が可能な理解水準」、「『知識の操作的適用』が可能な水準」、「『知識の制御的適用』が可能な水準」を挙げている。以上に枚挙した水準は、全く異質なものではなく、概念的に対応する部分を有するものである。これらの読解・知識理解水準の中から、本研究では、工藤(1993, 1997)で設定された、「統語論的レベル」、「意味論的レベル」、「実用論的レベル」の3水準を採用することとする。その根拠は、工藤(1993, 1997)において、それぞれの水準を測定するために使用された課題の測定尺度としての妥当性がある程度確認されているためであり、また後述する本研究目的の検討にあたっても、適切な尺度になるだろうという想定に依っている。

それぞれの読解水準に関して、工藤(1997)は次のように述べている。「『統語論』的レベルとは、主として、文を構成する語の形式的関係あるいは、文章を単位にした場合の文およびパラグラフの形式的関係を理解することによって達成できるレベルである。これには、特定の語の他の語による定義の理解から、語の主従関係の理解、文どうしの結合関係の理解、さらに文章全体の論理構造の把握まで含まれる。また、『意味論』的レベルとは、語や文および文章とそれが指し示している具体的事象の関係を理解することで達成できるレベルである。これには、個々の語や文の指示対象の理解から、文章全体の具体的含意の理解まで含まれる。『実用論』的レベルとは、語や文および文章が指し示している意味内容と自らの知識・信念との関係を理解しているレベルである。ここでは、読み取った文章内容によって、自らの既有知識・信念および行動(判断・推理など)が影響される。」

「統語論的レベル」より「実用論的レベル」に読解水準が進めば進むほど、知識は統合され、その知識操作・制御が可能になっていくことから、よりその理解は深まっているといえるだろう。したがって今回、「統語論的レベル」より「実用論的レベル」の読解水準を、より深い水準として記述することにする。

本研究では特に仮説は設定しないが、文章内容と矛盾する既有知識の存在はその読解を妨害するという先行研究の結果を踏まえると、読み手がその既有知識に矛盾する内容が記述された文章の読解を試みようとしたとき、あまり深い読解水準には到達できず、逆に既有知識と一致する内容が記述された文章の読解を試みようとしたときは、より深い読解水準に到達できるのではないかという予想はたてられる。

そもそも本研究で扱う既有知識とは、その正誤を伴わない、読み手の個人的見解や意見、思い込みということになり、文章における筆者の主張内容のいわば価値判断をするための基準とされる信念ということができる。よって、以下、本研究で扱う既有知識を信念と呼ぶこととする。

以上を踏まえ、本研究の目的を以下に明記する。

目 的

本研究では、書き手の主観的主張が主として記された文章の読み取りにおいて、読み手の信念の差異が、その読解水準に及ぼす影響を調査する。その際、当該文章内容に対して、読み手の信念が一致する場合、その読み手はより深い読解水準に到達でき、一方、読み手の信念が一致しない場合、その読み手はあまり深い読解水準には到達できないのではないかという予想も併せて検討する。

方 法

1. 調査協力者

大学生・大学院生計40名が本調査に協力した。彼らは全員、調査冊子に採用した読解を課す文章を未読である。なお、大学生・大学院生を調査対象としたのは、ジェンダーをトピックとする今回の文章内容を考慮し、ジェンダーに対する信念を保持している者がそこにはある程度存在しているのではないかという想定による。

2. 手続き

研究のための調査は、2008年10月に行われ、調査冊子を用いての質問紙法によった。調査協力者は調査者から調査冊子を直接手渡しされ、各自のペースでその回答にあたった。その所要時間は1人あたり約25分であった。調査冊子の内容の詳細は後述の通りである。

3. 調査冊子

(1) 構 成

使用した調査冊子は全8ページからなり、その構成は以下のようになっていた。

・フェイスシート [原冊子1 ページ]

学部・研究科と性別(「男性・女性」のどちらかに○をつけるようになっている)を記入させる欄を設け、以下の冊子目次も記載した。

- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| ・ 事前質問 [原冊子2 ページ] | ・ 文 章 [3～4 ページ] |
| ・ 質 問 1 [4 ページ] | ・ 質 問 2 [5 ページ] |
| ・ 質 問 3 [6 ページ] | ・ 質 問 4 [7 ページ] |
| ・ 研究概要 [8 ページ] | |

なお以下では、事前質問 を性差観テスト、文 章 をテキスト、質 問 2 をテストA、質 問 3 をテストB、質 問 4 をテストCとそれぞれ記述することとし、それぞれの役割や設置目的、さらには先んじて分析の際の得点化の方法を次項から述べる。

(2) テキスト (Appendix 参照)

テキストは、web上のHPに公開されている長尾誠夫の文章「ジェンダー論は妄想の産物」(URL: <http://homepage1.nifty.com/1010/jender.htm>)より、抜粋したものを採用した(1380字)。テキストの書き手である長尾は、男らしさ・女らしさの大半は望ましい徳目であると述べ、ジェンダーフリー

を批判する主張を展開している。またここでは、内容をよく理解するまで繰り返し読むよう指示した。なお、このテキスト読解中にも課題を設け、特定の文章部分に関して、調査協力者にその受容度の評定を行わせている。このことについては次項で述べる。

(3) 対象者を選定・分類する課題

① テキスト中に設置された課題と「質問 1」について

テキスト中に設置された課題は、テキスト内容に対する読み手の受容性を測定するものである。書き手の主張が記述されているテキストの各部分、計9箇所(TABLE 1参照)にはアンダーラインが引かれ、そのアンダーライン部分の内容に対して、「受容できる」か「どちらでもない」か「あまり受容できない」かをそれぞれ、「○」、「△」、「×」の記号で、読解中その都度ごとに評定させた。その評定の際は、アンダーライン部分の前後もよく読んで評定するよう指示した。

分析の際には、その各部分の「○」・「△」・「×」の評定に各2・1・0点をあて、その総計を受容得点とする。するとその受容得点は、計0～18点間で導かれ、受容得点が高いほどテキストの内容に対して受容的であり、逆に低いほど批判的であると言える。この受容得点を信念測定のための尺度の一つとし、分析対象者を分類する際の指標の一つとする。こうした測定尺度を用いた根拠は、受容得点が読み手の信念に基づいて評定され導かれたものであるという点から、いわばテキストの読み取り時に信念によって価値判断が行われ、それが発露したものと考えられるところにあり、また大関(2007)において、受容得点は読み手の読後態度との関連性を有していることが示されているところにもある。したがって、受容得点が高いほど、テキストの内容が読み手の信念に概ね一致しているということができる。

TABLE 1 アンダーライン箇所

No.	テキスト部分
1	ここにはいくつもの誤謬がある。
2	これらは安定した社会を築くために醸成された文化、あるいは慣習というべきものであり、全否定すべき根拠はどこにもない。
3	一般に言われる「らしさ」の大半は望ましいものである。
4	「男らしさ」には“我慢強さ”や“逞しさ”“責任感”、“女らしさ”には“優しさ”や“繊細さ”“母性的包容力”等があることから、それは明らかだろう。
5	こうした「らしさ」を、「ジェンダー＝悪しきもの」という一面的な見方によって否定すれば、望ましい徳目が消えていき、人間性の荒廃を招くのは必至であろう。
6	「らしさ」に入らない少数の個があるからといって、望ましい徳目を含みすべての「らしさ」を否定するというのは、少数による全体支配——すなわちファシズムと同根の発想である。
7	肝心なのは、「らしさ」を否定するのではなく、多様な価値観を許容することであろう。
8	「らしさ＝内的規範」なき自由は放縦に過ぎず、放縦が蔓延すれば社会は容易に荒廃する。
9	このように、ジェンダーフリーの背後には、モラルを低下させ社会を荒廃へと導く強烈な「毒」が隠されているのである。

そして「質問 1」は、テキストの読み取り直後の理解度を問うものとなっている。テキストの内容全体をどの程度理解できたかを「①理解できなかった～④理解できた」の4件法で評定させた。前もって、内容をよく理解するまで繰り返し読むよう教示してあるため、ここで「①理解できなかった」や「②あまり理解できなかった」と評定した調査協力者は、分析対象者から除外されることとなる。

② 性差観テストについて

テキストの読み取り前に設置されたテストであり、これには伊藤(1997)の作成による性差観スケール(以下、SGC)から一部抜粋したもの(計25項目)が採用された。その各項目に関して、調査協力者の直感的な感想を「①そう思わない～④そう思う」の4件法で評定させた。

分析の際には、その各項目の「①」～「④」の評定値に各1～4点をあて、その総計を性差得点とする。この性差得点を信念測定のためのもう一つの尺度とし、分析対象者を分類する際の指標の一つとする。今回は性差得点が高いほど、ステレオタイプのな性役割観を保持していると考えられ、逆に低いほど、ジェンダーフリー志向であると考えられる。すると、採用したテキストの書き手の主張内容を踏まえると、性差得点が高いほど、テキストの内容が読み手の信念に概ね一致してくるものと考えられる。ただ、このSGCは、大関(2005, 2006, いずれも未発表)でも採用されたのであるが、その実験条件下においては、性差得点と読み手の読後態度・関心との関連、さらには上記と同様に導かれた受容得点との関連のいずれも見られず、SGCにより導かれた読み手の性差観の読解活動への関与が否定される結果となっている。それにも関わらず、またあらためてSGCを採用するのであるが、その根拠は、今回あらたに読解水準を測定する尺度を使用するところにあり、先行研究では確認されなかった当該性差観の読解活動への反映を想定してのものである。

なお、受容得点による対象者の分類と性差得点による対象者の分類は独立して行われ、よって、分析・調査検討もそれぞれ独立して行われることとなる。

(4) 読解水準を測定する課題(TABLE 2参照)

テキストの読み取り後に、その読解水準を測定するための3課題を設置した。これらいずれの課題に回答する際も、テキストは読み直さないよう教示した。

① テストAについて

テストAは、統語論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題である。これに関して工藤(1997)は、「文章の構成要素の形式的関係を問うものが考えられる」としている。そこで本研究では、テキストから抜粋した文章内容あるいはそれを虚偽的に改変したものをほぼ前件と後件を有する命題の形式(「pならばqである。」)で表現し、その命題の正誤判断を問う課題として作成の上、使用した。作成された全10命題項目とその正答:【正 or 誤】はTABLE 2に示されている。得られた回答は正答と照合され、合致した場合ごとに1点が加算され、計0～10点間で得点化がなされることになる。

② テストBについて

テストBは、意味論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題である。これに関

して工藤は、文章の意味内容の理解がそれに基づく正しい予想をするための必要条件であることを踏まえ、文章には直接記述されていない事項を文章内容に基づいて予想させるものが考えられるとしている。そこで本研究では、社会を荒廃させるものとして考えられる事象をテキストに準拠して考え出し、回答させる課題を作成の上、使用した。このテストBの正答は、テキストで挙げられている「ジェンダーフリー」や「『らしさ』を否定すること」と関する事象を回答したものとする。

③ テストCについて

テストCは、実用論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題である。これに関して工藤は、文章内容と矛盾する既有知識と読解した文章内容というあらたな項が付け加わるといった既有知識の変化が生じた上で、文章内容と既有知識との関係をその課題への回答に反映させることを要求するものを挙げている。こういった特定の言語行動を要求する課題は、工藤(2008)によって「誤前提課題」としてまとめられている。工藤によれば、「誤前提課題」とは、「学習材料の内容と矛盾する誤った前提にもとづく質問に対して答えるよう、学習者に求める形式の課題」である。また、その課題に正しく回答するためには、「新しく得られた知識によって推論過程そのものを制御し、新しい推論の方向性を生み出しうる水準に到達していなければならない」とも述べている。本研究が取り扱う信念の場合は、そもそもその正誤が存在しないため、誤前提課題は一見使用できないようにみえるが、上述の言語行動を要求することは次のような類似した課題を使用すれば可能であることが考えられる。その課題とは、テキストの主張内容と反する前提に基づく質問に対して答えるよう読み手に求める形式を採ればよいので、ジェンダーフリーを批判しているテキスト内容

TABLE 2 読解水準を測定する3課題

① テストA	正答
1 ウーマンリブ運動は、女性が男性に支配されているという「性支配」体系を構築した。	【正】
2 ジェンダーフリーとは、「男・女らしさ」を撤廃しようとするものである。	【正】
3 ジェンダーのほとんどが、社会的文化的に作られたものだという認識は誤りである。	【正】
4 現在の「らしさ」には、安定した社会を築くために醸成された文化、あるいは慣習というべきものがある。	【正】
5 行動規制(因襲)や男尊女卑的な発想も時には必要である。	【誤】
6 一般に言われる「らしさ」の大半は望ましいものである。	【正】
7 「らしさ」を、「ジェンダー=悪しきもの」という一面的な見方によって否定すれば、望ましい徳目が消えていく。	【正】
8 すべての「らしさ」を否定しきれないところに、ファシズムと同根の発想がみられる。	【誤】
9 「らしさ」の半数は否定されることがあっても、多様な価値観を許容することが肝要である。	【誤】
10 「らしさ」なき自由は、社会に荒廃をもたらす。	【正】
② テストB	
(テキスト)の内容に準ずるならば、社会を荒廃させるものとしてどのような事象が考えられますか。	
③ テストC	
ある中学生に「どうしてジェンダーとは、よくないものなのですか？」と尋ねられたら、あなたはどうか答えてあげますか。(テキスト)の内容を踏まえつつ、あなたが知っていることを全部使って、できるだけ詳しく教えてあげるつもりで、その答えを書いて下さい。	

に反する前提、つまり、ジェンダーを批判する前提に基づく質問に対して答えるような課題を作成すれば、その条件は満たされることになる。本研究において、このような課題を「反意前提課題」と命名することにする。

テストCでは、今回、テキストの内容を踏まえることを明記しているが、誤前提課題に関する先行研究を考慮すると、テキスト内容に読み手の信念が一致しない方向にある場合、テキストで述べられた主張は、その回答に表出してこないことが考えられる。一方、テキスト内容に読み手の信念が一致する方向の場合、テキストの主張がその回答に表出することが考えられる。このテストCの正答は、テキストで述べられている主張（「ジェンダーフリー」や「『らしさ』を否定すること」の弊害）をその回答に含めているものとする。

4. 結果の予測

以上までを確認し、ここに目的を踏まえた結果の予測を記すことにする。

- ① 受容得点が高い対象者においては、テストAからテストCの課題に進むにしたがって、それが低い対象者より、より多くの正答が見られるだろう。
- ② 性差得点が高い対象者においては、テストAからテストCの課題に進むにしたがって、それが低い対象者より、より多くの正答が見られるだろう。

先にも述べたが、過去に受容得点と性差得点間に連関がみられたことはない。よって、対象者の分類にそれぞれの得点を使用した場合、それに付随してもたらされる結果が同様なものになることは考え難い。しかしここでは、読解水準を測定するあらたな尺度を使用することと、それぞれの得点が読み手の信念の指標になるという想定を踏まえ、あらためて予測がたてられた。

結 果

1. 分析対象者の選定

分析に入る前に、調査協力者40名のうち、質 問 1 において、「①理解できなかった」あるいは「②あまり理解できなかった」と評定した者、また、各質問項目・テストにおいて未記入箇所がある者は分析対象者から除外された。その結果、計32名（男性14名、女性18名）が分析対象者（以下、対象者）として選定された。

2. 受容得点による対象者分類に基づく分析

分析にあたって、テキストの読み取り中に読み手によって評定された受容得点を用いて対象者の分類を行った。対象者32名の受容得点の平均値 $M = 12.1$ ($SD = 2.83$) となった。そこで、受容得点が13点以上の対象者を受容得点高群（以下、Hj 群）、12点以下の対象者を受容得点低群（以下、Lj 群）として、それぞれに対象者を分類した。その結果、Hj 群 ($M = 14.4$, $SD = 1.30$) が15名、Lj 群 ($M = 10.0$, $SD = 2.09$) が17名となった。

(1) テストAについて

テストAは、統語論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された、10命題の正誤判断を問う課題であった。得られた回答を正答に照合して得点化したところ、Hj 群の平均 $M = 7.67$ (SD

= 1.54)、Lj 群の平均 $M = 7.59$ ($SD = 1.81$) となった。

検定の結果、有意差はみられず ($t = 0.13$, $df = 30$, n.s.)、いずれの群も7割以上の比較的高い正答率が示された。よって、統語論的水準の読解において群差は認められないといえよう。

(2) テストBについて

テストBは、意味論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された、社会を荒廃させるものとして考えられる事象をテキストに準拠して考え出させる課題であった。回答の分類にあたっては、テキストで挙げられている「ジェンダーフリー」や「『らしさ』を否定すること」と関する事象を回答したものが正答と判断され、それ以外の回答は誤答と判断された。その結果を TABLE 3 に示す。また、正答と判断された回答例を TABLE 4 に示す。

TABLE 3 テストBの結果(人数)

	正 答	誤 答	計
Hj	13	2	15
Lj	13	4	17

TABLE 4 テストBの正答例

- ・多くの家庭で、男性は仕事、女性は家事や育児という構図はみられる中、女性が子育てを放棄すること。
- ・男性らしい視点、女性らしい視点が失われてしまうこと。
- ・男性の筋力面における強さ、女性の精神面における強さを否定すること。

検定の結果、頻度分布の偏りは有意ではなく ($p = 0.66$; フィッシャーの直接確率法による)、Hj 群では8割以上の、一方、Lj 群でも7割以上の比較的高い正答率が示された。よって、意味論的水準の読解においても群差は認められないといえよう。

(3) テストCについて

テストCは、実用論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題であった。回答の分類にあたっては、テキストで述べられている主張(「ジェンダーフリー」や「『らしさ』を否定すること」の弊害等)をその回答に含めているものが正答と判断され、それ以外の回答は誤答と判断された。その結果を TABLE 5 に示す。また、正答と判断された回答と誤答と判断された回答のそれぞれの要約を例として TABLE 6 に示す。

TABLE 5 テストCの結果(人数)

	正答	誤答	計
Hj	6	9	15
Lj	4	13	17

TABLE 6 テストCの正答例

【正答例】

社会的・文化的な面から言うと、男女別々の特性すなわち「個性」をもつのは当たり前のことであり、一概にそれをよくないものと言うことはできない。ただ、その個性によって性役割を過度におしつけたり、男尊女卑の発想に結びつけたりしないよう、注意することは必要である。

【誤答例】

ジェンダーという概念を持ち出すと、男女の差異をますます強調させてしまうことになる。男女平等を目指す現代社会において、それはいけないものののだ。

Hj 群では4割程度の、一方、Lj 群では2割程度の比較的低い正答率となった。しかし、検定の結果、頻度分布の偏りは有意ではなく ($p = 0.45$; フィッシャーの直接確率法による)、よって、実用論的水準の読解においても群差は認められないという結果になった。

受容得点に基づいて2群を設け、それぞれの課題における群差が確認できるか試行したのであるが、以上から、いずれの課題においても群差はみられないという結果となった。したがって、受容得点が高い対象者においては、テストAからテストCの課題に進むにしたがって、それが低い対象者より、より多くの正答が見られるだろうという予測は支持されない結果といえよう。

3. 性差得点による対象者分類に基づく分析

各読解水準において、文章内容の受容の違いでは対象者間に差が見られなかった。そこで、ここでは、性差観の違いによって対象者を分け、読解水準における違いを見ることにする。この分析にあたっては、性差観テストに採用されたSGCから導かれた性差得点を用いるのであるが、全25項目に関してそのまま得点化するのではなく、項目間相関をとり、そこで低相関を示した計4項目を削除し、残り計21項目 (TABLE 7参照) から性差得点は算出された。これは、この方法により、今回の対象者の性差観、つまり信念をより適切に測定する項目を使用して、その算出が可能になるであろうという根拠に基づく。すると性差得点は、21～84点間で導かれることになり、そして対象者32名の性差得点の平均値 $M = 50.7$ ($SD = 10.4$) となった。そこで、性差得点が51点以上の対象者を性差得点高群 (以下、Hs 群)、50点以下の対象者を性差得点低群 (以下、Ls 群) として、それぞれに対象者を分類した。結果、Hs 群 ($M = 57.1$, $SD = 4.84$) が19名、Ls 群 ($M = 41.4$, $SD = 9.26$) が13名となった。

TABLE 7 性差得点算出に使用されたSGC21項目

-
- ・ 子育てはやはり母親でなくては、と思う。
 - ・ 体力において男性がまさる以上、社会のあらゆる場で男性が優位な地位を占めるのはやむをえない。
 - ・ 男性は女性にくらべ攻撃的である。
 - ・ 女性は体力や精神面の点でパイロットなど人命をあずかる仕事には向いていない。
 - ・ 女性は男性にくらべ手先が器用である。
 - ・ 人前では妻は夫を立てた方がよい。
 - ・ 論理的思考は男性の方がすぐれている。
 - ・ 男性と女性は本質的に違う。
 - ・ 女性は男性にくらべ感情的である。
 - ・ 最終的に頼りになるのはやはり男性である。
 - ・ 男性は女性にくらべ人を使うのが上手である。
 - ・ 冒険心やロマンは男性の究極のよりどころである。
 - ・ 女性が人前でたばこを吸うのは好ましくない。
 - ・ 女性のすぐれた思想家はあまり出ない。
 - ・ 一家の生計を支えられないような経済力のない男性は、夫として失格である。
 - ・ 男性は背が高くなければ、と思う。
 - ・ 子どものことより自分のことを優先して考えるような女性は、母親になるべきではない。
 - ・ 男性はむやみに弱音を吐くものではない。
 - ・ 家庭のこまごまとした管理は女性でなくては、と思う。
 - ・ 女性は出産する可能性があるため、男性と仕事の上で互角に並ぶのは無理である。
 - ・ 中学になると男の子の成績の方が伸びる。
-

(1) テストAについて

テストAは、前記の通り、統語論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された、10命題の正誤判断を問う課題であった。得られた回答を正答に照合して得点化したところ、Hs 群の平均 $M = 7.84$ ($SD = 1.64$)、Ls 群の平均 $M = 7.31$ ($SD = 1.70$) となった。

検定の結果、有意差はみられず ($t = 0.89$, $df = 30$, $n.s.$)、いずれの群も7割以上の比較的高い正答率が示された。よって、統語論的水準の読解においては性差観の違いによる群差は認められないといえよう。

(2) テストBについて

テストBは、前記の通り、意味論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された、社会を荒廃させるものとして考えられる事象をテキストに準拠して考え出させる課題であった。回答の分類にあたっては、こちらもテキストで挙げられている「ジェンダーフリー」や「『らしさ』を否定すること」と関する事象を回答したものが正答と判断され、それ以外の回答は誤答と判断された。その結果を TABLE 8 に示す。また、正答と判断された回答例は TABLE 4 の通りである。

TABLE 8 テストBの結果(人数)

	正 答	誤 答	計
Hs	15	4	19
Ls	11	2	13

検定の結果、頻度分布の偏りは有意ではなく ($p = 1.00$; フィッシャーの直接確率法による)、Hs 群では7割以上の、一方、Ls 群でも8割以上の比較的高い正答率が示された。よって、意味論的水準の読解においては、性差観の違いによる群差はなかったといえよう。

(3) テストCについて

テストCは、前記の通り、実用論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題であった。回答の分類にあたっては、テキストで述べられている主張(「ジェンダーフリー」や「『らしさ』を否定すること」の弊害等)をその回答に含めているものが正答と判断され、それ以外の回答は誤答と判断された。その結果を TABLE 9 に示す。また、正答と判断された回答と誤答と判断された回答のそれぞれの要約を例として示したものは TABLE 6 の通りである。

TABLE 9 テストCの結果(人数)

	正 答	誤 答	計
Hs	9	10	19
Ls	1	12	13

検定の結果、頻度分布に有意な偏りがみられた ($p = 0.023$; フィッシャーの直接確率法による)。

Hs 群では約半数の者が正答していたが、一方、Ls 群では1割にも満たない低い正答率となり、よって、テストCにおいてのみ群差が認められるという結果が得られた。したがって、実用論的水準の読解においては、性差観による読み取りの違いが認められたといえる。

性差得点に基づいて2群を設け、それぞれの課題における群差が確認できるか試行したのであるが、以上から、テストAとテストBの課題においては群差がみられなかったが、テストCの課題においては群差がみられるという結果となった。したがって、性差得点が高い、それゆえ、伝統的な性役割観を保持していると判断できる対象者は、そうでない対象者に比べて、統語論的水準の読解、意味論的水準の読解では差がなく、実用論的水準の読解でより適切な読み取りができ正答が見られたといえよう。

つまり、性差得点が高い対象者においては、テストAからテストCの課題に進むにしたがって、それが低い対象者より、より多くの正答が見られるだろうという予測は大方支持されたといってい

4. テスト間の関係について

工藤(1993, 1997)によれば、読解の3水準間には一定の論理的関係が想定されている。すなわち、統語論的レベルの達成が意味論的レベル達成の必要条件であり、意味論的レベルの達成が実用論的レベル達成の必要条件であるという想定である。本研究においても、テストAからテストCまでの各課題は、読解の3水準の達成を測定するために設定されたものである。よって、各課題が測定尺度としての妥当性を有するならば、各課題の回答分布の関係は、読解の3水準間の論理的関係と類似したものになるはずである。そこで、各課題の回答分布を、受容得点による分類に基づく TABLE 10a と、参考までに性差得点による分類に基づく TABLE 10b にも示し、その妥当性を確認することにする。なお、テストAに関しては、全体の平均 $M = 7.63$ ($SD = 1.66$) であることから、8点以上の者を「高」、7点以下の者を「低」として、その回答を、関係が見てとりやすいように「高」・「低」の2カテゴリーに分類した。

TABLE 10a 各テスト間の関係 (人数)						TABLE 10b 各テスト間の関係 (人数)					
テストC		正 答		誤 答		テストC		正 答		誤 答	
テストB		正答	誤答	正答	誤答	テストB		正答	誤答	正答	誤答
テストA						テストA					
Hj	高	5	0	2	2	Hs	高	6	0	5	2
	低	1	0	5	0		低	2	1	2	1
Lj	高	2	0	7	1	Ls	高	1	0	4	1
	低	1	1	3	2		低	0	0	6	1

論理的関係との完全な一致を示す数字には、それぞれ下線を付した。これにより、全体の66%に相当する21名が、想定される論理的関係と完全に一致した回答パターンを示していることが確認できる。したがって、テストの回答分布にみられる関係は、読解水準の論理的関係とほぼ類似してい

たといえるだろう。

さらにそれぞれの得点に基づく分類において回答分布をみると、テストAで「高」に分類され、テストBで正答した者のうち、テストCにも正答できた者はHj群で71%（7名中5名）、Lj群では22%（9名中2名）であり、Hs群で56%（11名中6名）、Ls群では20%（5名中1名）であった。しかし検定の結果、ここではいずれの頻度分布にも有意な偏りはみられなかった。

討 論

本研究は、書き手の主観的主張が主として記された文章の読み取りにおいて、読み手の信念の差異が、その読解水準に及ぼす影響を調査することを目的とした。それにあたり、当該文章内容に対して、読み手の信念が一致する場合、その読み手はより深い読解水準に到達でき、一方、読み手の信念が一致しない場合、その読み手はあまり深い読解水準には到達できないという予想がたてられた。以上の予想を検討するにあたって、受容得点に関して、また、性差得点に関して、次のことが予測された。それは、受容得点が高い対象者においては、テストAからテストCの課題に進むにしたがって、それが低い対象者より、より多くの正答が見られるだろうという予測と、性差得点が高い対象者においては、テストAからテストCの課題に進むにしたがって、それが低い対象者より、より多くの正答が見られるだろうという予測である。

結果として、次のことが確認された。

まず、受容得点に関しては、どの課題においても群差はみられないという結果となった。よって、上記の前者の予測は支持されなかったといえよう。

一方、性差得点に関しては、テストAとテストBの課題においては群差がみられなかったが、テストCの課題においては、性差得点の高い者の正答率が低い者の正答率より有意に高いといった群差がみられた。すなわち、伝統的性役割観を持つものは、より深い読解水準に到達していたと判断できよう。よって、上記の後者の予測は大方支持されたといっていよう。

今回、受容得点に基づく分析では群差がみられなかったにも関わらず、SGCを用いた性差得点に基づく分析では群差がみられたというのは、先行研究の結果を踏まえると、大変興味深い結果であると考えられる。それは、大関(2007)では、文章の読み取り中に評定された受容程度と、読後の文章内容に対する関心程度といった読後態度との高い関連性が確認されているが、一方、大関(2005, 2006, いずれも未発表)では、性差得点と読み手の読後態度との関連性は確認されず、SGCにより導かれた読み手の性差観の読解活動への関与が否定されているからである。ちなみにここでも、この受容得点と性差得点には連関がみられておらず、さらに本研究においてもその相関はさほどみられなかった($r = 0.34$, $df = 30$, $p < .10$)。よって今回の結果から考えるに、読み取り中の受容程度といった、いわば情動的な側面は、読後の文章内容に対する関心程度といった、これも同じく情動的な側面との関わり合いを有しているが、実際の理解程度といった、いわば認知的な側面に関して言えば、まさに性差観といった読解中の一時的な情動とはまた別の固定的な認識の側面に関わり合いを有しているといえる。こう考えると、読み取り中の文章内容に対する受容程度こそ読み手の信

念を反映したものであると考え、それが信念を測定する一つの尺度であると考えてきたこれまでの見解は成立しなくなる。よって、読み取り中に見られた受容程度はあくまで一時的な情動の状態を示すに過ぎず、理解の程度を予測するための指標としては十分でない、というように修正されなければならない。文章の理解程度を予測するためには、信念という言葉が表すように、強度に固定的な観念を直接測定する必要があるのである。実験に際しては、読前・読後ともに、測定するものの性質的側面を区別した上での尺度設定が求められよう。

ただ今回の結果が、いずれの先行研究とも大筋合致している点は、読み手の信念と文章内容の一致程度が、その理解程度に大いに影響を及ぼす点である。主観的主張が展開された文章の読み取りにおいて、その理解と読み手の正誤を伴わない主観的信念との連関が確認されたことは、本研究が示す一知見であろう。

文章の読み取りにおいて、読み手の信念と文章内容との一致率が高い場合は問題ないが、それが低い場合、その理解を促すための読解援助が望まれる。その追求は今後の継続的な検討課題となる。また、検討課題と合わせ、本研究の問題点を記しておくならば、「反意前提課題」の不十分さと対象者の吟味不足あるいは学習状況の設定不足が考えられる。前者に関しては、「回答にあたり文章内容を踏まえる」旨の教示を行ったわけであるが、「誤前提課題」により近づけるためには、「文章では（反意）と述べられていたが、どうしてか」というように、問いかけ自体を修正せねばならないだろう。一方、後者に関しては、文章の読解程度に関わらず、読み手は自己の性差観だけにに基づき反意前提課題に回答した可能性も拭いきれないことから、文章内容と一致程度の低い性差観を持つ者を対象とし、読解援助の有無によりどのような差異がその読解水準に生じるかを確認するというような実験デザインも採る必要があるだろう。以上をここに訓戒し、次回以降、その改善にあたり、実験の精度向上に努めるものとする。

さて、本研究では、設置された課題（テストA～C）間の尺度としての妥当性の検討も付随して行われた。その結果、7割弱の者が想定される論理的関係と完全に一致した回答パターンを示していることが確認された。工藤（2008）では、「誤前提課題」は解決が困難であり、知識の関連付けを促進する教授効果を最も鋭敏に検出できると述べられているが、ここでもそれと同様の認知的負荷を課すべく設定されたテストC、つまり、実用論的レベルの達成を測定するための課題：「反意前提課題」の正答率は特に低く、またその課題においてのみ群差が確認されるに至った。よって本研究は、工藤の論説を強化する傍証の一つとなりえよう。

【文 献】

秋田喜代美 2002 読む心・書く心 北大路書房

青野篤子・森永康子・土肥伊都子 1999 ジェンダーの心理学 ミネルヴァ書房

土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度の形成 教育心理学研究, 44, 187-194.

平山祐一郎 1993 連想法を取り入れた作文指導法の効果に関する研究—作文量を中心として— 教育心理学研究, 41, 399-406.

- 堀田美保 1998 性役割分担に関する社会における一般的意見の分布—大学生による推定— 教育心理学研究, 46, 221-228.
- 井関龍太・川崎恵里子 2006 物語文と説明文の状況モデルはどのように異なるか—5つの状況的次元に基づく比較— 教育心理学研究, 54, 464-475.
- 伊藤裕子 1997 高校生における性差観の形成環境と性役割選択—性差観スケール (SGC) 作成の試み— 教育心理学研究, 45, 396-404.
- 川崎恵理子 1994 文章理解のプロセスに及ぼす知識の効果 教育心理学研究, 42, 395-402.
- Kintsch, W. 1994 Text comprehension, memory and learning. American Psychologist, 49, 294-303.
- 工藤与志文 1993 科学読み物の読解に及ぼす誤った知識の影響 読書科学, 37, 68-76.
- 工藤与志文 1994 既有知識と矛盾する文章内容の読解に及ぼすルール教示の効果 東北大学教育学部研究年報, 42, 75-96.
- 工藤与志文 1997 文章読解における「信念依存型誤読」の生起に及ぼすルール教示の効果—科学領域に関する説明文を用いて— 教育心理学研究, 45, 41-50.
- 工藤与志文 2008 「誤前提課題」を評価課題として用いた教授学習実験の概観と展望 教授学習心理学研究, 4, 40-49.
- 麻柄啓一 1990 誤った知識の組み替えに関する一研究 教育心理学研究, 38, 455-461.
- 麻柄啓一 2006 例外への懸念がルール学習に及ぼす影響—ルールの適用をいかに促進するか— 教育心理学研究, 54, 151-161.
- 舩田弘子 1997 社会的事象を扱った文章の読解に及ぼす学習者の知識・意見の影響 読書科学, 41, 81-90.
- 森敏昭・秋田喜代美編 2006 教育心理学キーワード 有斐閣
- 森敏昭・井上毅・松井孝雄 1995 グラフィック認知心理学 サイエンス社
- 森敏昭・中條和光編 2005 認知心理学キーワード 有斐閣
- 夏堀睦 2002 学校内での物語評価についての一般的信念の検討 教育心理学研究, 50, 334-344.
- 大村彰道監修 2001 文章理解の心理学 北大路書房
- 大関嘉成 2005 文章読解における読み手の信念が心的表象形成に与える影響 (未発表)
- 大関嘉成 2006 文章読解における読み手のジェンダー観がその読後態度に与える影響 (未発表)
- 大関嘉成 2007 文章読解における読後態度を形成する諸要因 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第55集第2号, 89-108.
- Kendeou, P., & van den Broek, P. 2005 The Effects of Readers' Misconceptions on Comprehension of Scientific Text Journal of Educational Psychology, 97, 235-245.
- 榎博文 1989 説得を科学する 同文館
- 佐藤公治 1996 認知心理学からみた読みの世界 北大路書房
- 柴田利男 野辺地正之 1991 青年期の身体に対する男らしさ・女らしさの認知 教育心理学研究, 39, 40-46.
- スーザン・ベンサム著 秋田喜代美・中島由恵訳 2000 授業を支える心理学 新曜社
- 瀧本敦 1986 ヒマワリはなぜ東を向くか 中公新書
- 宇野忍編 2002 授業に学び授業を創る教育心理学 中央法規

Appendix：テキスト

ジェンダーとは生物学的に規定された性「sex」ではなく、社会的文化的に規定された性差「gender」を意味している。こうした「ジェンダー」の概念は、60年代から70年代にかけてアメリカで起きたウーマンリブ運動を発端としている。

女性が男性に支配されているという「性支配」体系を構築したウーマンリブ運動は、その支配構造から女性を解放するために、社会的制度における同等な権利を得る運動を展開する。やがて、これが一定の成果をおさめると、今度は「男女」という枠組み自体に差別構造が内在しているという認識に至り、これを抹消しない限り真の解放はないと考えるようになる。ジェンダーとは、生物学的性の差異ではなく、人間が人為的に作り出した社会的文化的性差であり、支配者(男)が被支配者(女)を統治するための道具であるというのだ。こうして、「男女」という枠組み、すなわち「男・女らしさ」を撤廃しようとする動きが生じた。これがジェンダーフリーである。

しかし、ここにはいくつもの誤謬がある。その最たるものが、ジェンダーのほとんどが社会的文化的に作られたものだという認識である。こうした考えはM・フーコーの『性の歴史』やJ・バトラの『ジェンダートラブル』等による「性欲や性別は歴史的社会的に構築された観念的カテゴリーであるという」分析に拠っているが、最近の脳生理学はこうした“思い込み”を見事に一蹴している。医学の専門書には、いわゆる「男・女らしさ」が脳の構造的差異や男性ホルモン(アンドロゲン)の有無によって生じることが明確に書かれている。ジェンダー論者がいかに言質を弄してもこうした学問的事実によって、その論理は根底から覆されるのだ。

もちろん、現在の「らしさ」には男女の生得的特質から派生したジェンダー(社会的文化的性差)があるのは確かである。しかし、これらは安定した社会を築くために醸成された文化、あるいは慣習というべきものであり、全否定すべき根拠はどこにもない。たしかに「女は～してはならない」とか「女のくせに」といった行動規制(因襲)や男尊女卑的な発想は排除されるべきだが、一般に言われる「らしさ」の大半は望ましいものである。「男らしさ」には“我慢強さ”や“逞しさ”“責任感”、“女らしさ”には“優しさ”や“繊細さ”“母性的包容力”等があることから、それは明らかだろう。こうした「らしさ」を、「ジェンダー＝悪しきもの」という一面的な見方によって否定すれば、望ましい徳目が消えていき、人間性の荒廃を招くのは必至であろう。

こうした批判に対しては次の反論がある。「らしさ」という枠が存在する限り、その枠に入り切らない個を阻害することであり、それは「差別」につながるというのだ。しかし、「らしさ」に入らない少数の個があるからといって、望ましい徳目を含むすべての「らしさ」を否定するというのは、少数による全体支配——すなわちファシズムと同根の発想である。肝心なのは、「らしさ」を否定するのではなく、多様な価値観を許容することであろう。

ジェンダー論者は抑圧からの解放を叫ぶが、「らしさ＝内的規範」なき自由は放縦に過ぎず、放縦が蔓延すれば社会は容易に荒廃する。このように、ジェンダーフリーの背後には、モラルを低下させ社会を荒廃へと導く強烈な「毒」が隠されているのである。

The Relation of Criterional Belief of a Value Judgment with a Reading Comprehensive Level

Yoshimasa OZEKI

(Graduate School of Education, Tohoku University)

The aim of this study was to examine whether a reading comprehensive level was influenced by a difference of readers' belief on reading text contained subjective gender contents. Adopted indicators of belief were receptivity toward the text contents and an outlook on gender differences, and three comprehensive levels (a syntactic level, a semantic level, a pragmatic level) were set up. Subjects were undergraduate and graduate students (male; 14, female; 18). The following results were obtained: (1) the reception degree did not have connection with the reading comprehensive level; (2) an outlook on gender differences that support the subjective gender contents of text led to a deeper comprehensive level. Therefore, there findings suggested that readers' belief that agree with contents of text had connection with a reading comprehensive level.

Key words : text comprehension, a reading comprehensive level, receptivity, gender, belief

